

Brosse : *Les songes des hommes éveillés*

ジャンル	五幕韻文喜劇
初演	1645年(推定)、オテル・ド・ブルゴーニュ座
出版	1646年
出典	特になし

執筆は44年末から45年と推定される。御前公演ののちオテル・ド・ブルゴーニュ座で上演された。献辞によれば、公演は好評であった。出版後も上演は続いたが(46-47年の上演作品リストにある)、のち完全に忘れられる。タピスリーの使用、複雑な劇構成、作品に現われた世界観などがしだいに当時の人びとの美意識にそぐわなくなったためとされる。

前作『無実で有罪』がカルデロンの翻案であったのに対し、この喜劇は自身のオリジナルだとプロスは述べる。たしかに舟が難破して、恋人が死んだと絶望する若者のもとに、突然その相手が姿をあらわすという悲喜劇のパターン、あるいはロマネスクな恋愛、男装、だまし、などの要素はこの頃にてそろっていたものの、それらをただ羅列するのではなく、劇中劇にして展開させる劇はほかに例をみない。3つの即興劇と1つの本物の芝居が5幕のなかにはめこまれて、構造が多重化されている。バロック期の喜劇の傑作といえる。場所はタルモンの城内(中庭をはじめ計11箇所をマルク・ヴェイレルモは数える『17世紀フランス劇作品分析辞典』)、時の一致(真実らしさに多少は欠けるものの、夕方から深夜までにおさまる)、筋の一致は守られている。

〔第一幕〕ポルドーの貴族リジドールは乗っていた舟が難破して、愛する女性の行方がわからなくなった。絶望する彼をタルモンの城の総督クラリモンが客としてもてなす。気晴らしをさせようと、城主たちはその日、狩猟にでかけた。幕があくとそこは中庭で、狩から戻ったリジドールは、自身の不幸をクレオントに語っている。聴き手のクレオントもじつは総督の姉妹のクロリーズにある日突然恋をして、今は片思いに悩んでいると告白。そこにクロリーズが相思の貴族リュシダンとともに現われたので、クレオントは退散。今度はその2人が、ついでクラリモン自身も登場して、憂鬱病にかかっているリジドールをなぐさめ、彼に、つぎの気晴らしを提供したいと申し出る。リジドールは不幸を忘れるには、恐ろしい話を聞くほうが効果的であるとして、自ら地獄のイメージを言葉で綴る。つぎの気晴らしの劇中劇のテーマはここまでのリジドールの嘆きからとられている。クラリモンは皆を城内に入れる。そこに、リジドールの恋人が海でおぼれ死んだらしいという知らせを小姓が持ってくる。そのとき酒に酔った農民のデュ・ボンが現れて、酔いの妄想を語り、さいごに眠りこんだ。クラリモンはこの農民も余興に利用しようと思いつく。

〔第二幕〕城内の一室。クレオントはクロリーズに愛をうちあける。しかしクロリーズは拒否。そこに城主クラリモン、リュシダン、客人のリジドールがトランプ遊びをしに尋ねてくる。片思いのクレオントは狩猟の疲れをとると言って隣室のベッドで眠ってしまった。ゲームが一落ち着いたところで、クラリモンは即興劇の仕掛けを準備。クレオントの眠るベッドの柱に紐をくりつけて

ベッドが上にあがるようにしたのち、部屋を暗やみにして扉をしめきる。そして外から戸のガラス越しに、火事だと叫ぶ。室内のクレオントは火に囲まれたと錯覚して死ぬ覚悟を決める。火がおさまったとみると、これは心のなかの恋の炎が実際の火になって燃えた、と判断。悪い夢をみたのだと推測する。夢を分析して、再び睡眠をとろうとするが、その間にベッドが宙にあげられたので、寝る場所が見つからない。うろうろする彼の頭上にベッドが降りてきて、死んでしまいそうな気になる。仕掛人たちは扉からクレオントの声だけを聞いて楽しんでいる。そして再び火事だと叫び、助けを求める。つぎにトランプ遊びの会話を聞かせる。中のクレオントは、愛するクロリーズが助けを求めているのか、ただ遊んでいるだけなのかわからなくなる。クロリーズはリュシダンを連れて室内に入り、さらにクレオントをからかう。クレオントはそれまでのことは睡眠中におきたこと、と主張。しかし、クレオントは目覚めていたとクロリーズは真実を述べる。

〔第三幕〕クラリモンはつぎの余興の概要をリジドルに聞かせる。主人公は泥酔した農民デュ・ボンで、クロリーズらが仕掛ける。まずデュ・ボンは、目が覚めてみると貴族の衣装を着せられているので、自分を把握できず驚きあわてる。覚醒しているのに「立ったまま寝ている」ような気分になる。リュシダンと小姓のアリストンが主人と従僕の役割で登場し、いんねんをつけて剣を抜く騒ぎに。またアリストンはデュ・ボンを嘘の世界にひきずりこみ、彼にも嘘の受け答えをさせることに成功する。クロリーズもデュ・ボンの結婚相手の候補として登場。デュ・ボンは貴族をまねて愛の言葉を捧げざるをえなくなるが、農民の生活感があふれる表現を用いるので笑いを誘う結果になる。デュ・ボンはそのあと、中庭にだされ尻に爆竹をくくりつけられて点火される。結局彼は、意識が混乱したのはバカス神の仕業ととらえて逃げ帰る。リジドル自身は一時苦悩の遠ざかるのを感じる。

〔第四幕〕幕が取り払われるとそこはクロリーズの部屋。眠くなったと言って彼女はカード遊びの相手のリュシダンを自室にさがらせる。じつはその部屋には秘密の扉があった。今度はクロリーズが悪戯をしかける役で、見物人はリジドルとクラリモンである。彼女は自室で読書をする恋人を訪ね、愛の苦悩を語りに来たと偽る。誰にもみられないように部屋の鍵を厳重に彼にかけさせる。そして詩の韻を学習しているうちに水が飲みたいと言いだす。リュシダンは水を外にとりに行くためにさきほどしめめた扉をあけにかかる。彼女は秘密の扉を通して水と燭台を持ち、リュシダンの部屋の入口にたって待ち、扉をあけた彼を驚かす。クロリーズはこうして2つの部屋を何度か行き来し姿を消しては現して、恋人を困惑させる。最後には見物していたクラリモンとリジドルも仲間に入れて、リュシダンがみていないところで兄妹が入れ替わるなどしたために、リュシダンは愛する人の実像と虚像の区別がつかなくなり、目覚めて夢みるのはもうごめん、寝て道理にしたがって夢をみたい、と言う。アリストンが来客のあることを告げる。クラリモンは、リュシダンの惑いをとくようクロリーズに言う。リジドルは楽しんだものの、苦悩は消え去らない。

〔第五幕〕訪問者はリジドルの恋人イザベルその人だった。彼女はクラリモンの提案を受け、彼女自身がうまい女優になって芝居を上演することで恋人との再会を果たすことにする。周囲の者たちも喜劇の評判を口にし、高い評価を与える。こうしてリジドルとイザベルの2人の半生が劇中劇になって再現される。幼くして孤児になった美少女が年ごろになったとき、リジドルにその肖像

画を見ただけで恋をされたこと、結婚が決まり、ボルドーに2人で帰る途中で舟が難破したこと、がまず明らかにされる。そののち男装のイザベルが登場。リジドール役を演じるリュシダンは、恋人の姿をみて驚きの声をあげる。本物のリジドールもそれがイザベルだと認め、同じように驚きの声をあげる。しかしクラリモンはリジドールが夢をみているだけだと主張。リジドールもイザベルは死んだのだと考え、口をつぐむ。本物のコメディはそののち、イザベルがいかにして命拾いをしたかの説明に入る。芝居のなかでリュシダンは間違いなく自分こそリジドールだという台詞を言うと、本物のリジドールは舞台のイザベルにむかって彼女がだまされていると叫ぶ。イザベルはようやく、「目をあけたまま夢をみている」ような顔つきの本物のリジドールに語りかけ、芝居は現実と交差する。そこに手紙が届き、安否が気遣われていたイザベルの兄弟の無事も知らされる。リジドールはさいごに、目覚めている者たちに夢をみせて気晴らしをさせてくれた、城主たちに感謝し、今回の作品を公にしたいと述べる。

(野池 恵子)

Rotrou : *L'Innocente infidélité*

ジャンル	五幕韻文悲喜劇
初演	1634年末か1635年初頭、オテル・ド・ブルゴーニュ座
出版	1637年
出典	不明。ただし部分的には、Lope de Vega作 <i>Laura perseguida</i> と <i>Sortija del olvido</i> の影響が考えられる(ロトルーはこの二作品とも戯曲化している)。

タイトル(『罪なき不貞』)だけを見ると他愛ない誤解や取り違えを仕掛けにした喜劇のようだが、「典型的悲喜劇のうちでも、最も重要かつドラマティックな作品」(ランカスター)である。その理由は、筋が求心的であり、緊張感に富み、緩急のアクセントが明瞭だからだろう。魔法の指輪という単純な不条理を起動力に据えていながら、それが王の性衝動を象徴的に表出しようものとなっていること、二人の女性主要人物がそれぞれ善悪の対立概念を誇張して割り振られ、造形されていること、そして例外的な脇役の活躍(彼らにも善悪が割り振られている)が、「ドラマティック」である所以である。特に王の愛人エルマントの悪女ぶりは興味深く、筋を支配するのは指輪を身につける彼女であると言っても過言ではない。「悪」は行動するのだ。対する「善」、天使的に善良な王妃パルテニーは、「悪」の攻撃を無抵抗で全面受容しようとする。そして、この対照を発生させたのは王である。王は「イノサン=無垢、無実」では到底ありえず、それを承知しながら(王は自らの生命で罪を償おうとする)あえてこのようなタイトルをつけた作者は、いわば被告の弁護人の立場をとっていると言えよう。時は一晩をはさんでほぼ24時間、場所はほとんどが王宮とそれに隣接する寺院、一部が近郊(?)のエヴァンドルの城。

〔第一幕〕

エピール王フェリスモン(Félimond)の愛人であったエルマント(Hermante)は、絶望と怒りに苛まれている。王が彼女を捨て、パルテニー(Parthénie)との婚礼を今にも挙げようとしているのだ。愛人の悲嘆を王は一顧だにせず、侮蔑するばかりである。屈辱と苦悩から逃れるには死しかないが、ひとりでは死なない、恋敵も巻き添えにし、「エピール全土を死の劇場としてやる」と破滅的な心境に陥ったエルマントであった。宥める乳母のクラリアーナ(Clariane)に対しても、「おまえがこの無謀な恋に火をつけた」と責任転化をする。術策に長けたクラリアーナは魔術師に相談し、魔法の指輪を手に入れる。一方、パルテニーと清純な愛を分かち合っていたクラリモン(Clarimond)も悲嘆のどん底にいる。王権に逆らうことはできないが、せめてパルテニーに躊躇や後悔の影はないか、腹心に命じて花嫁を観察に行かせる。

〔第二幕〕

寺院で荘重な婚姻の儀式が始まる。大祭司が王とパルテニーの手を結び合わせ永遠の誓いをさせ終わった時、魔法の指輪をはめたエルマントが現れる。彼女の姿は王にしか見えないのだが、王は

たちまちその姿に魅せられ、結婚を後悔する。参列者は王の様子が激変したのを不安に思い、囁き交わしながら寺院を出る。残ったエルマントはひとり勝ち誇る。「今こそエピールを地獄が支配する」と。クラリモンの腹心は、急に花嫁に冷淡になった王の異変を報告する。クラリモンの絶望は癒されるかもしれない。とはいえ、パルテニーは義務と名誉を重んじる女性だ。王の気持ちがどうであれ、彼女は王を愛するだろう。クラリモンは一計を案じる。悪賢い策略家として知られるクラリアーナを買収し(しかも彼女は老女のくせに彼に秋波を送っている)、国王夫妻の動静を探らせるのだ。さて、「強力な本能」により「忌むべき情熱」(王)の虜となってしまった王は、忠臣エヴァンドル(Evandre)の諫めも無視し、エルマントを再び追い求める。彼女は王を焦らし、王妃の地位と引換えでなければこの身を与えない、と仄めかす。

〔第三幕〕

王はエルマントの傲慢かつ巧みな性的挑発に屈し、新妻を亡きものにする決意を固める。今夜、船でエヴァンドルの城に行かせ、事故を装って船を転覆、彼女を水死させようという計略である。この命令を受けたエヴァンドルは王の非道を嘆き、全てを王妃に打ち明ける。「私の幸せより王の幸せが大事」と考える善良で可憐な王妃は、「王のためなら喜んで死ぬ、それで彼が迷妄から醒めるなら」と理不尽な死を受入れようとする。しかし人間的で賢明なエヴァンドルは、王には使命を果たしたと報告し、彼女を自分の城に匿うことにする。クラリモンの方は、エルマントの乳母クラリアーナの買収に成功していた。クラリアーナは、エルマントに再度執着した王が企てた王妃暗殺計画、そしてエヴァンドルが王命に背いて王妃を匿う計画まで探り出してくる。王妃の死は公になるのだから、クラリモンが彼女を奪って逃亡しても何の問題もない、とクラリアーナは彼に誘拐を勧めるのだった。

〔第四幕〕

深夜。事は成ったも同然と判断したエルマントは王と寝室に赴く。「焦らせたのは快楽を深めるため」と言い訳して。クラリモンとクラリアーナは王妃誘拐の準備を整え、さらに王妃の侍女も買収して、女主人にあらかじめ事情を知らせ、安心させる役目を与える。手腕の芽えをひとり誇るクラリアーナだったが、王妃を恋する誘拐犯の名前を侍女に告げなかったため、王妃は怒り、エヴァンドルと共にピストルで武装して待機する。誘拐の手順と各自の役割も決めて忍び込んできた誘拐犯一味は、クラリアーナを残し、クラリモンはエヴァンドルに、その腹心は侍女に射殺されてしまう。自分を拉致しようとしたのが幼なじみのクラリモンだったと分かって王妃は驚愕し、消沈する。クラリアーナは貪欲ゆえになした自らの悪事を認め、エルマントの指輪の秘密も自白する。

〔第五幕〕早朝。エルマントの寝室。王が早い夜明けを残念がっていると、エヴァンドルが昨夜の上首尾を報告に現れる。忠臣は王を遠ざけておいてから、悪の力を讃えて髪をくしげずるエルマントに短剣を突きつけ、指輪を奪い取る。愛人の悲鳴を聞いて王が駆けつけ、エヴァンドルから短剣を取り上げ、怒りと共に死罪を言い渡す。怪我はないか、と愛人を見やると、そこにいたのは「何ともおぞましい女」であった。エルマントは狂乱し、長い髪をかきむしりながら走り回る。「私はこの魔女を抱いたのか」と愕然とする王。魔法は解けた。エルマントは塔に幽閉され、自分自身と全

世界を呪いながら裁判を待つ。しかし、美德の女王パルテニーは戻らない。王は王妃の葬礼を丁重に行い、墓の周りに彼女の近親者を集める。皆に向かって罪を告白し、自刃しようとする。と、そこに現れたのは、エヴァンドルに連れられたパルテニーであった。王は王妃に謝罪し、諧謔をもってエヴァンドルに感謝。エヴァンドルは疲労した王妃を労り、つもる話は王宮で、と皆をいざなう。婚姻の神を讃える王。

(鈴木美穂)

Rotrou : *Les Deux Pucelles*

ジャンル	五幕韻文悲喜劇
初演	1636年末、オテル・ド・ブルゴーニュ座
出版	1639年
出典	セルヴァンテス作 <i>Novelas ejemplares</i> 中の <i>Las Dos Doncellas</i> 。第二幕と第三幕が依拠しているが、他の幕はほぼオリジナル。

婚約者が恋人か、選択の葛藤に耐えられず出奔した若者を追って旅立った男装の美女二人、暗闇(一、二幕)でのコメディと正体暴露のサスペンス、残忍な盗賊との剣戟など、見せ場はそろっているが今ひとつ決め手に欠ける悲喜劇である。二人のヒロインの恋敵としての決着は四幕六場で行われてしまい、あとははじき出された一人がどのように死を乗り越えて「適切な居場所」を見つけるか、その父親の「恥」がいかに濯がれるかが興味の中心となる筈なのだが、目ざましい工夫は見られない。恋敵同士の友情の可能性の暗示も結局「勝者の余裕」に止まる。ただ、コミカルな役割を受け持つ宿屋の女将が、情熱的なロマンスは所詮庶民の日常とは相容れない、という認識に至ることと、三人の父親(=老人)の老いの描写がいくらか興味深い。時は二日以上、場所はセヴィリアとカステルブラン。なお本作は、Quinaultの処女作 *Rivales* (初演 1653年) の原典となっている。

〔第一幕〕

セヴィリア。闇夜に小さなランプを灯し、逢い引きの場所に急ぐのはドン・アントワーヌ (Don Antoine) である。努力が実を結び、レオカディ (Léocadie) の心を獲得したのだ。だが無粋な従僕が追いついて来て、婚約者テオドーズ (Théodose) の手紙を渡す。それは妊娠した彼女を顧みない最近の彼の冷たい態度を嘆き、死を思う乙女の哀切な手紙だった。不貞確信犯の彼も動揺する。「幸せな結婚」か「一瞬の快樂」か、葛藤に呼応して足取りは停滞したり速まったり。ついに彼は決心する。婚約も恋も一時棚上げにし、この足で旅に出るのだ。ただし、婚約者には一言残しておく。さて、レオカディが恋人を待ちわびていると、闇の中で足音がする。てっきりアントワーヌだと思った彼女は愛に満ちた言葉をかけるが、それは熟睡しているはずの父親ドン・サンシュ (Don Sanche) だった。父は激怒し、「家の恥」を言い立てる。

〔第二幕〕

次の夜。カステルブランの宿屋の女将は美貌の若者が投宿したので興奮している。悩みがある様子で食事もとらず寝てしまったけど、どんな事情があるのかしら、と好奇心満々だ。亭主は嫉妬しながらも取り合わない。そこにまたもや美青年客、アレクサンドル (Alexandre) が訪れた。満室なのだが、先的美青年は眠っているし、後の美青年は夜明けに発つというからかまうまい、と女将は同室にしてしまう。先的美青年は男装のテオドーズである。彼女は深夜目覚めて運命を嘆き、自分を指して「不幸な娘」と口走る。アレクサンドルは言葉をかけて事情を知りたがる。彼女は驚愕する

が彼を信用し、サラマンカで勉強中の兄弟アレクサンドルのこと、婚約者アントワーヌに裏切られ、ローマに出奔した彼を追って旅立ったことを打ち明ける。アレクサンドルは助力を申し出て、二人はまた眠りにつく。やがて女将がランプを持ち、しどけない姿で入室してくる。どちらかの美青年からキスを盗もうという魂胆だが、迷っていると亭主が現れる。夫婦が口論するうち二人は目覚め、テオドーズは同室の若者が兄弟だと分かる。彼女は恥じて殺してくれと頼むが、アレクサンドルは、裏切り者の追跡を共にしようと提言。

〔第三幕〕

森の中。テオドーズとアレクサンドルはサラマンカに向かう途中、先行の従者が盗賊にあって逃げてくるのに出会い、さらにやはり盗賊に襲われて木に縛りつけられている騎士を救出する。一行は賊を避けるため、一旦宿屋に戻ることにする。女将は大喜びだが、亭主は嬉しくない。身元を尋ねるアレクサンドルに対し、騎士ははかばかしい返答をしない。アレクサンドルは諦めたが、やりとりを聞いていたテオドーズは騎士の身元を見抜く。両耳にピアス穴があいていること、ドン・サンシュの娘の美しさを否定したことから、騎士がセヴィリアで評判の美女、レオカディその人であることを（「あなたの謙虚さがあなた自身を否定したのです」）。レオカディはアントワーヌとの恋の全てを物語る。そして彼が逢い引きを反故にした夜、テオドーズという美女を誘って逃げたという噂があることも。テオドーズは、彼女の方が美しいと慰め、行動を共にするよう勧め、彼女とテオドーズとは希望と恐怖とを共有するだろう、と言う。

〔第四幕〕

宿屋の外。レオカディの素性を知ったアレクサンドルは彼女に恋心を抱き始めた。しかし彼女は未知の男たちと共に行くのが不安である。そこに三人の盗賊に追われてアントワーヌと従者が逃げてきた。レオカディは抜刀して恋人に加勢する。激しい闘い。盗賊は形勢不利とみて逃亡する。だがアントワーヌは傷を負っており、血を流して倒れる。それを見てレオカディも失神する。駆けつけた一堂は彼らを宿屋に運ぶ。平穏無事が信条の亭主は迷惑がり、女将は恋がもたらす災厄を目の当たりにして愕然とし、日常の生活意識に戻る。男装のまま身元を明らかにした二人の女性を前にして、重傷のアントワーヌはレオカディに率直に謝罪し、テオドーズを選ぶ。怒りと恥に苛まれ絶望の淵に落ちたレオカディは、テオドーズを殺して自殺する決意で彼女と対面する。しかしテオドーズは勝利を誇らず、自分の幸運が彼女の不運であることが自分の悩みだ、恋人と恋敵のどちらをも愛したい、彼女の幸福になるなら自分は喜んで死ぬ（だが自分が恋人を諦める、とは言わない）、と縷々述べるので、「恨みの正当性まで奪われた」と感じたレオカディは唐突に別れを告げ、森の中に姿を消す。

〔第五幕〕

死を求めて森を彷徨っていたレオカディは、盗賊捜索の警吏隊を見かけ、逃げるふりをして故意に捕まる。彼女はその場で盗賊の犯した罪を詳述し、今朝も二人の商人を襲って持ち物を奪い殺害したと、証拠の死体（既に追剥に殺害、放置されていた）と強奪物（自分の宝石）を見せたので、警吏隊は彼女を連行する。死刑は不可避だ。さて、「家の恥」を濯ぐため、レオカディの父ドン・サン

作品梗概

シュとテオドーズの父ドン・アンリ (Don Henri) は、森のはずれでアントワーヌの父ドン・ルイ (Don Louis) と対決する。彼らも老体に鞭打って子供たちを追って旅立っていたのだ。まずドン・アンリがドン・ルイと決闘を始める。するとそこにアントワーヌとテオドーズが止めに入り、さらに警吏たちと闘いながらアレクサンドルが現れる。彼は捕縛されたレオカディを救出しようとしているのだ。だが一堂が会したところで釈明がなされ、テオドーズとアントワーヌの仲は父親たちに改めて認められる。縄は解かれたが愛を失ったレオカディは、父親の勧めもあってアレクサンドルの愛を受け入れる。テオドーズは美しい義理の姉妹ができたと喜ぶ。

(鈴木美穂)